

# SINCE2019

仮デザイン版

## 西九州させぼ広域都市圏ビジョン (案)



---

## 西九州させぼ広域都市圏ビジョン(案)

---

## I

## 都市圏ビジョンの概要

## 1

## 策定の趣旨

国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、我が国の総人口は、平成27年（2015年）国勢調査時点の、約1億2,700万人が長期の人口減少過程の中で、平成52年（2040年）年には約1億1,100万人、12.6%の減少となり、65歳以上の老年人口の割合は35.34%となり、人口減少、少子高齢の急速な進展が見込まれています。

本圏域でもこの傾向は顕著で、平成27年（2015年）国勢調査における圏域12市町の人口約48万8,000人が、平成52年（2040年）には約37万人、24.2%の減少となり、老年人口の割合も平成27年（2015年）国勢調査時点で30.7%だったものが、平成52年（2040年）には37.7%になると見込まれています。

このような人口減少、少子高齢化の進行は、我が国全体の活力の低下や、経済規模の縮小を招き、地方においては地域経済の急激な活力低下、地域社会の衰退が懸念される一方、社会保障費などの増大によって、行政サービスを持続的、安定的に提供できなくなるという現実的かつ具体的な課題に直面することになります。

このようなリスクに対しては、行政区域の枠を超え、社会的、経済的に関係性のある自治体と横の繋がりを築き、医療や交通、産業といった分野において、行政サービスや都市機能を効率良く活用しながら、地域の社会・経済を支えていくことが重要となります。

そして、このような社会の構造的転換には相当の時間が必要となることから、これらに係る取組みは出来るだけ早くスタートさせることが肝要であり、この取組みを着実に進めることによって、厳しい財政状況を支える地域経済の活性化や、首都圏への人口一極集中といった都市部への人口流出に歯止めをかけ、地域に人を滞留させていくことが可能になると考えられます。

一方、国においても、地域で相当の規模と中核性を備える圏域において市町村が連携し、コンパクト化とネットワーク化により、人口減少・少子高齢社会においても一定の圏域人口を有し活力ある社会経済を維持するための拠点を形成する「連携中枢都市圏構想」が進められており、国の諮問機関である第31次地方制度調査会の中でも、自治法改正により新たに設けられた連携協約をはじめ、事務の共同処理の仕組みを活用して地方公共団体間の広域連携を推進していくべきとの答申がなされています。

今般、長崎県佐世保市、平戸市、松浦市、西海市、東彼杵町、川棚町、波佐見町、小値賀町、佐々町、新上五島町、佐賀県伊万里市及び有田町の12市町は、国が提唱する「連携中枢都市圏構想」の趣旨や、今後訪れる課題への危機感を共有した中で、将来に向けた地域経済・社会の一体的かつ持続的発展を図るため、佐世保市を中心市とする「西九州させば広域都市圏」の形成に取り組むこととしました。

この「西九州させば広域都市圏ビジョン」は、西九州北部地域等の各自治体が行政区域の枠を超え、様々な分野で相互に強みを伸ばし、弱みを補完しながら圏域全体を活性化していくための方向性を示し、今後の具体的な取組みを推進していくための中長期的な広域計画として策定するものです。

2

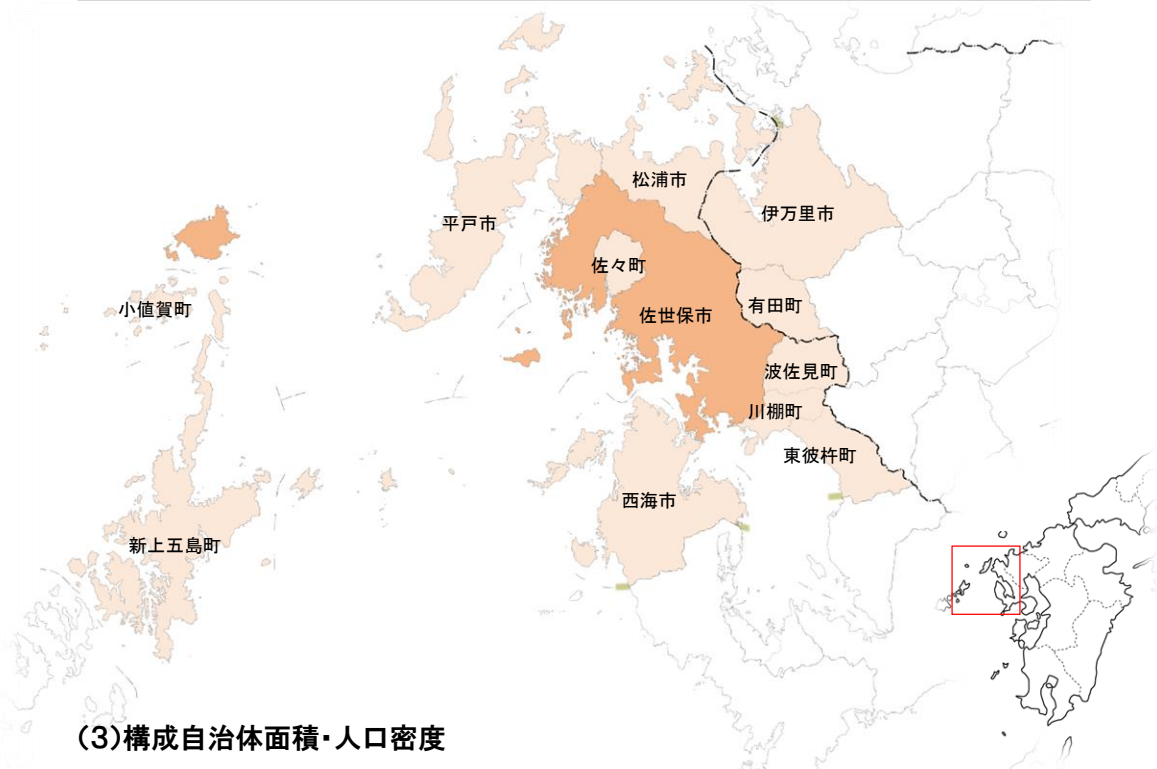
連携中枢都市圏の名称・構成自治体

(1)連携中枢都市圏の名称

「西九州させば広域都市圏」  
※以下本ビジョンでは西九州させば広域都市圏を「圏域」という。

(2)連携中枢都市圏の構成自治体 【合計5市7町】

|     |                                                       |
|-----|-------------------------------------------------------|
| 長崎県 | 佐世保市（連携中枢都市）、平戸市、松浦市、西海市、東彼杵町、川棚町、波佐見町、小値賀町、佐々町、新上五島町 |
| 佐賀県 | 伊万里市、有田町                                              |



(3)構成自治体面積・人口密度

|               | 佐世保市    | 平戸市    | 松浦市    | 西海市    | 東彼杵町  | 川棚町    | 波佐見町   | 小値賀町  | 佐々町    | 新上五島町  | 伊万里市   | 有田町    | 合計       |
|---------------|---------|--------|--------|--------|-------|--------|--------|-------|--------|--------|--------|--------|----------|
| 面積<br>(2016年) | 426.06  | 235.08 | 130.55 | 241.59 | 74.29 | 37.35  | 56.00  | 25.52 | 32.27  | 213.99 | 255.25 | 65.85  | 2,115.61 |
| 構成比           | 20.1%   | 11.1%  | 6.2%   | 11.4%  | 3.5%  | 1.8%   | 2.6%   | 1.2%  | 1.5%   | 10.1%  | 12.1%  | 3.1%   | 100.0%   |
| 人口            | 255,439 | 31,920 | 23,309 | 28,691 | 8,298 | 14,067 | 14,891 | 2,560 | 13,626 | 19,718 | 55,238 | 20,148 | 564,303  |
| 人口密度          | 600     | 136    | 179    | 119    | 112   | 377    | 266    | 100   | 422    | 92     | 216    | 306    | 267      |

(出典) 2017年全国都道府県市区町村別面積調 (国土地理院)

3

計画期間

計画期間は、2019年度から2024年度までの5年間とします。（※毎年度所要の変更有り）

## II

## 圏域の現状

## 1

## 西九州させぼ広域都市圏と構成自治体の概要

## (1)西九州させぼ広域都市圏の概要

本圏域は九州北西部に位置し、古くから連綿と人が住み続けてきた地域です。

洞穴遺跡の数は日本一であり、世界最古級の豆粒文土器が出土しています。また、大陸との交流も盛んで、数多くの大陸文化との融合の形跡が確認されている地域です。

戦国から江戸時代においては、本地域に海を舞台として活躍した松浦党が出現し、その流れを汲む平戸松浦氏による平戸藩6万3千石の領地として存続してきました。

五島地域においては、平家に連なる平家盛を始祖にもつとの伝説を有する五島家による統治が行われ、捕鯨などにより栄える一方、潜伏キリシタンによる開拓などが有名です。

また、近年では、世界遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」や、長崎・佐賀両県に跨る日本遺産である「肥前窯業圏」、そして、「世界で最も美しい湾クラブ」に加盟認定された九十九島等、数多くの魅力ある地域資源を有し、また、産業面でも国内有数の漁獲量を誇る水産業や歴史のある造船業等、工業・商業分野でも多様な産業が集積しています。

そして、これらを育んできた豊かな大地は地震が少なく、自然災害に強い土壌と気候に恵まれており、私たちの安全な暮らしを支えています。

## (2)構成自治体の概要

1



## 佐世保市

【連携中枢都市】

面積：426.06km<sup>2</sup> 人口：255,439人（平成27年国勢調査）

佐世保市は、九州の西北部、長崎県の北部に位置し、面積約427k m<sup>2</sup>、人口約25万人を有する都市です。

明治22年に海軍佐世保鎮守府が設置されて以降、戦前は海軍とともに発展し、戦後は平和産業港湾都市として、造船や炭鉱を柱とした産業の発展を経て、現在は、長崎県県北地域、佐賀県西部地域の中心的都市となっており、平成28年4月に中核市へ移行しました。

また、大小208の島々が織りなす美しい景観を誇る多島海「西海国立公園九十九島」、「世界遺産」、日本最大級のテーマパーク「ハウステンボス」、日本遺産に認定された「佐世保鎮守府」や「三川内焼」を有する観光都市であると同時に、みかんや牡蠣等の農水産物にも恵まれ、また、造船をはじめとした製造業、日本一長いアーケードを有する産業都市でもあります。

市内には米軍基地があり、また、広範囲な地域から人が流入して大きくなった都市であることから市民は多様性に富んでいます。

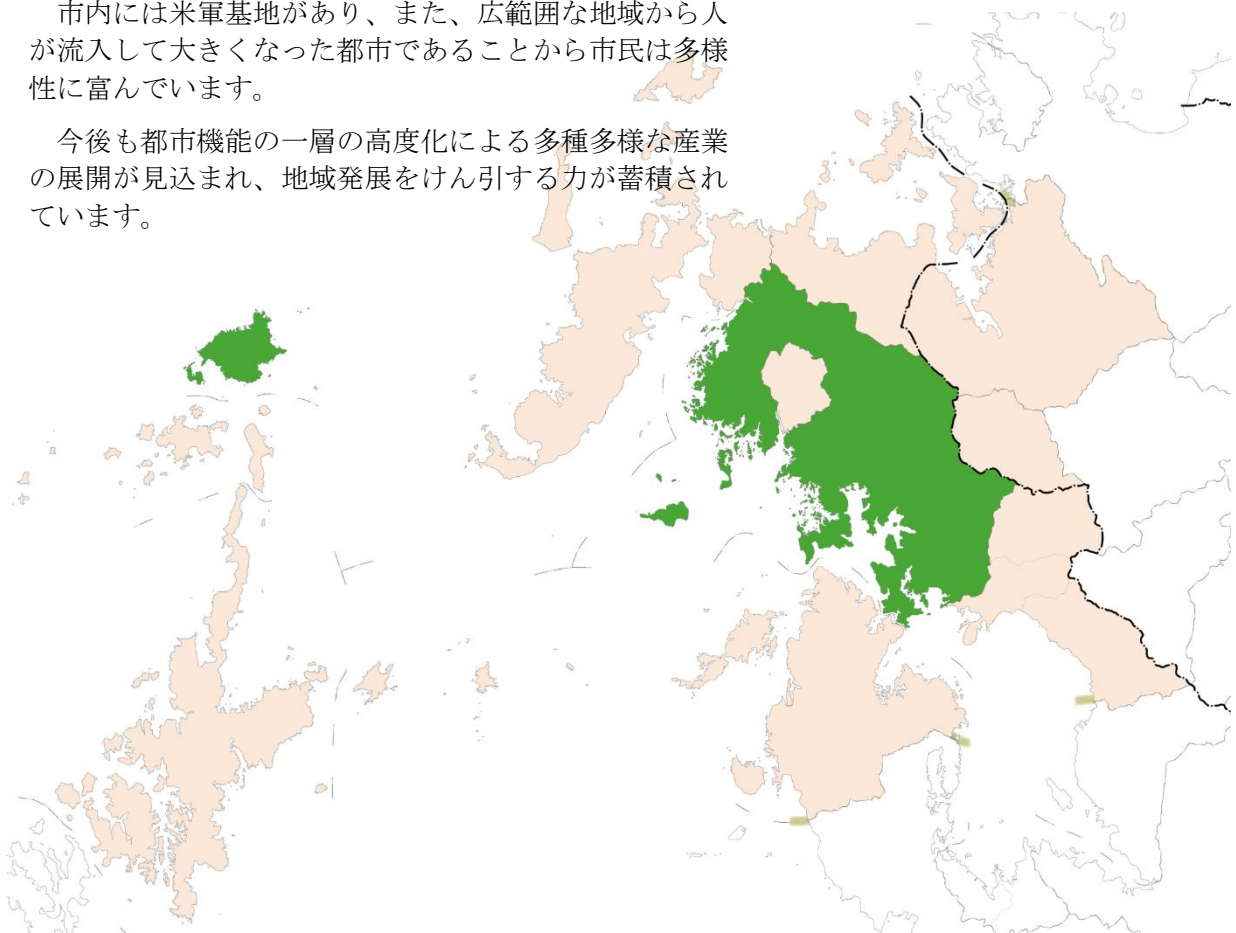
今後も都市機能の一層の高度化による多種多様な産業の展開が見込まれ、地域発展をけん引する力が蓄積されています。



西海国立公園九十九島



©ハウステンボス





## 1 西九州させぼ広域都市圏と構成自治体の概要

# 2 平戸市

面積：235.09km<sup>2</sup> 人口：31,920人（平成27年国勢調査）

平戸市は、圏域の中心市である佐世保市の北西部に位置し、面積約235 k m<sup>2</sup>、人口約3万1千人の都市です。

古くから大陸交流の玄関口として栄え、平安時代から中国や朝鮮との交易の中継地となり遣唐・遣隋使の寄港地として空海や栄西なども立ち寄っています。

16世紀には、日本に初めて来航したポルトガル船が平戸に入港し、南蛮貿易が行われました。17世紀前半には、オランダやイギリスの商館が設置されるなど海外文化やキリスト教伝来の窓口となり、市内には田平天主堂、宝亀教会など14の教会が存在します。

生月地区や大島地区には捕鯨で栄えた歴史があり、江戸時代後期には益富組、井元氏鯨組など西海捕鯨の中心地として名を馳せ、特に生月地区の益富組は日本最大の規模に達しました。

長崎県内でも有数の観光地として知られ、年間約175万人の観光客が訪れています。また、平成30年7月に世界文化遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」のうち、構成資産である「平戸の聖地と集落（春日集落と安満岳、中江ノ島）」を有しており、国内外からの観光客の増加が見込まれます。

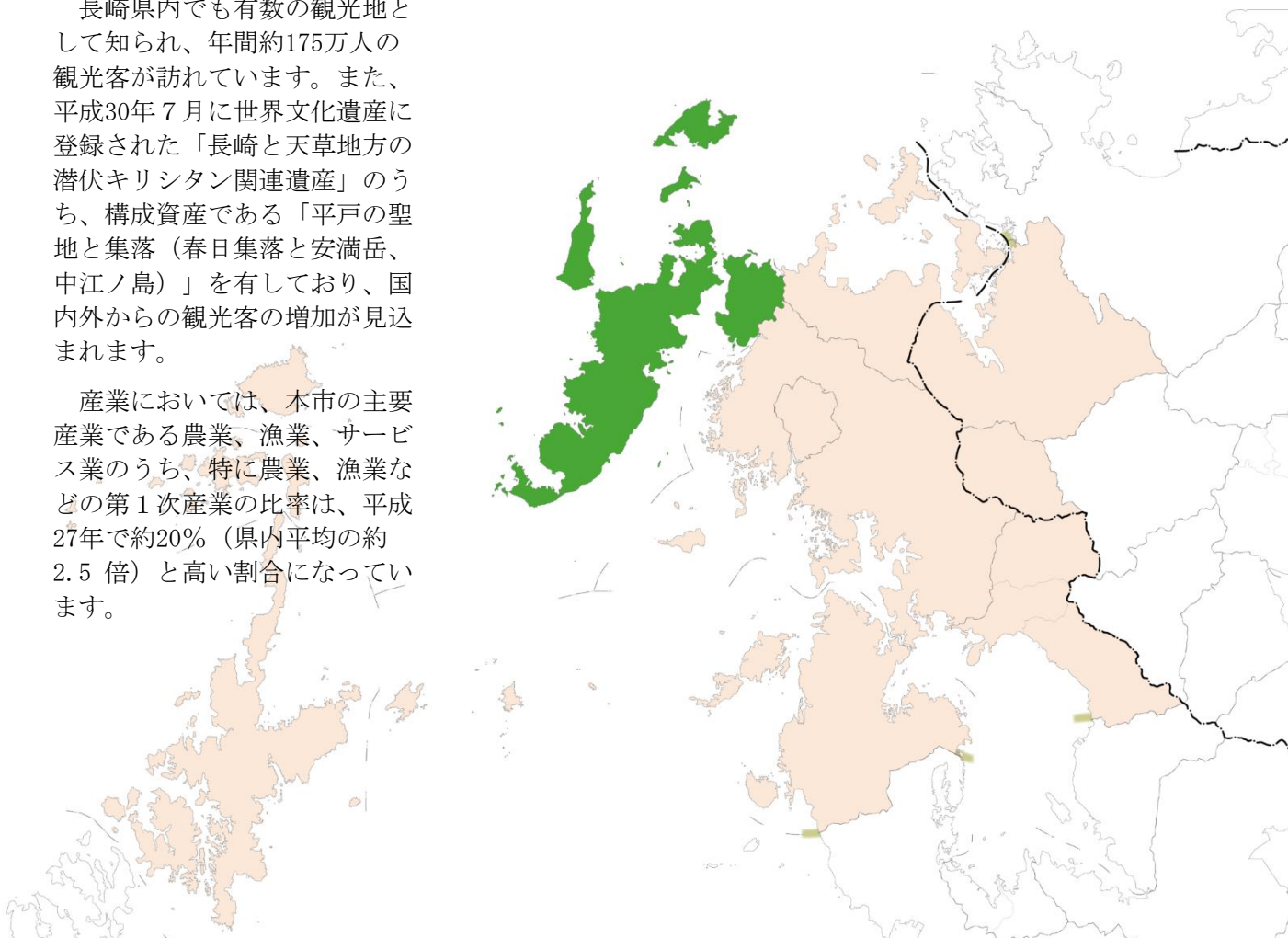
産業においては、本市の主要産業である農業、漁業、サービス業のうち、特に農業、漁業などの第1次産業の比率は、平成27年で約20%（県内平均の約2.5倍）と高い割合になっています。



寺院と教会の見える風景



平戸大橋



# 3 松浦市

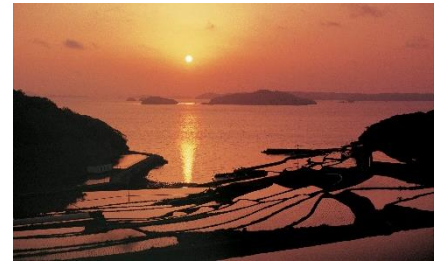
面積：130.55km<sup>2</sup> 人口：23,309人（平成27年国勢調査）

松浦市は、長崎県本土の北部に位置し、面積約131km<sup>2</sup>、人口約2万3,000人を有する都市です。

中世に九州北西部で活動した水軍・松浦党発祥の地であり、鎌倉時代に起きた元寇（文永の役・弘安の役）においては、元軍の大船団が松浦市鷹島沖に集結した際、暴風雨により沈没・退却したことでも知られています。

明治から昭和にかけては石炭産業を主力として栄えましたが、現在は、日本有数の水揚げ量を誇る松浦魚市場、海外炭を燃料とする国内最大規模の火力発電所を擁する水産物とエネルギーの一大供給基地となっています。また、高い技術力を持つ企業の誘致にも取り組み、本市から国内外へ向け、数多くの「メイドイン松浦」の製品が出荷されています。

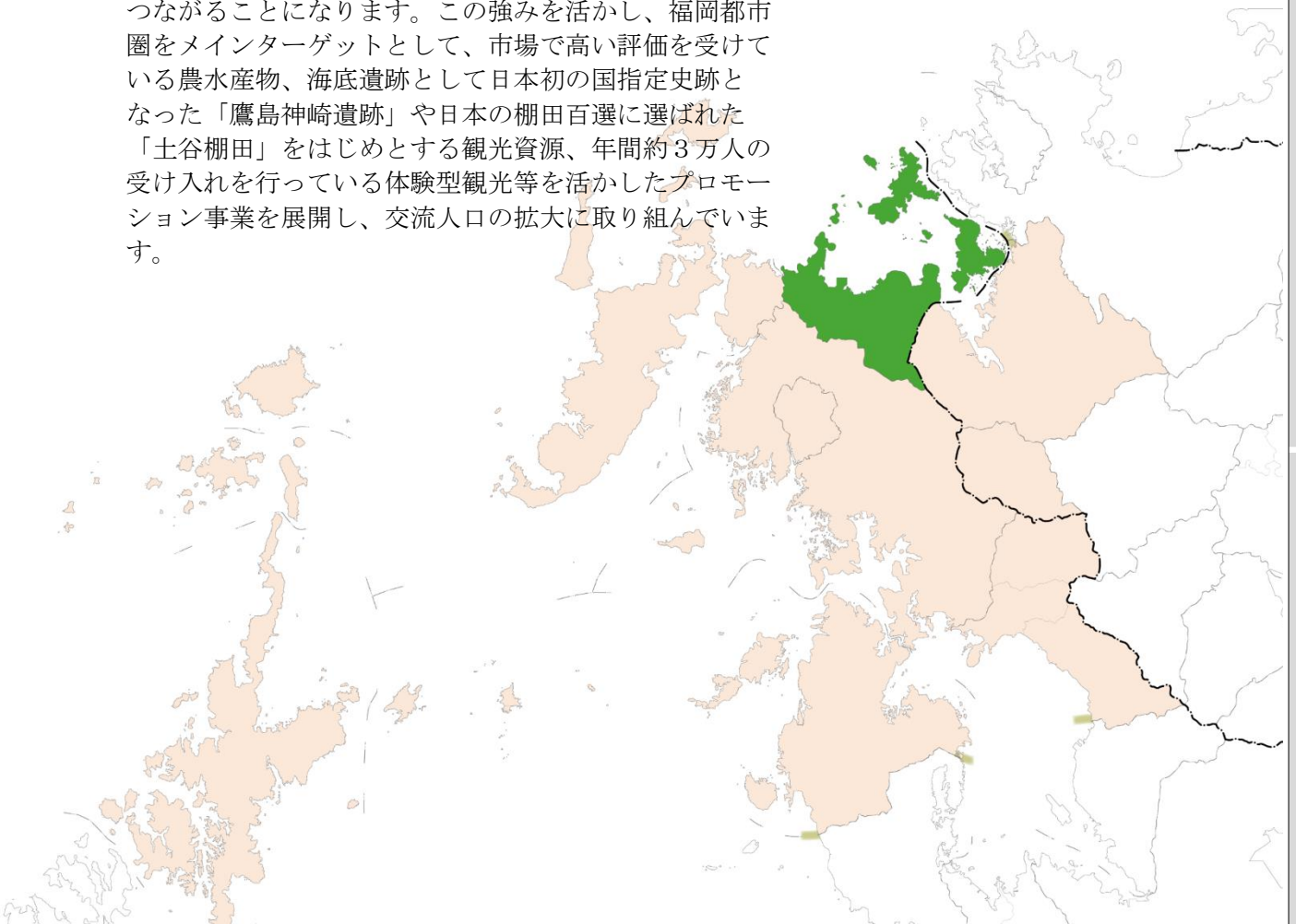
現在、市内では高規格道路「西九州自動車道」の整備が進められており、開通すると福岡市中心部と約70分つながることになります。この強みを活かし、福岡都市圏をメインターゲットとして、市場で高い評価を受けている農水産物、海底遺跡として日本初の国指定史跡となった「鷹島神崎遺跡」や日本の棚田百選に選ばれた「土谷棚田」をはじめとする観光資源、年間約3万人の受け入れを行っている体験型観光等を活かしたプロモーション事業を展開し、交流人口の拡大に取り組んでいます。



土谷棚田



松浦魚市場・松浦市水産加工団地





## 1 西九州させぼ広域都市圏と構成自治体の概要

## 4 西海市

面積：214.59km<sup>2</sup> 人口：28,691人（平成27年国勢調査）

西海市は、西彼杵半島の北部、県内の2大都市である長崎市と佐世保市の中間に位置し、面積約242km<sup>2</sup>、人口約2万9,000人を有する都市です。

東岸は大村湾に、西岸は外海の五島灘、角力灘、北岸は佐世保湾に面し、複雑な地形を持った海岸線や、点在する大小さまざまな島等、美しく優れた自然景観を有しています。

1562年に日本最初のキリシタン大名である大村純忠が横瀬浦にポルトガルとの貿易港を開いたことから、西海市は南蛮貿易やキリスト教と縁の深い歴史を持っています。江戸時代には大村藩に属しており、大村藩の捕鯨基地としても栄えました。

町村制が施行された明治22年4月時点では、13村で構成されていました。その後の合併、編入、町名変更を経て昭和44年1月に西彼町、西海町、大島町、崎戸町、大瀬戸町の5町構成となり、平成17年4月1日に5町が対等合併し西海市となりました。

西海市には、全国と比べても高い造船技術を持つ大島造船所を始めとして、松島火力発電所、ダイヤソルトといった優良企業があります。そういった民間と協力し、人材の確保及び育成について、トップランナーを目指します。また、土壌と漁場に恵まれた西海市の山海の幸は、全国各地でも評価の高い「メイドイン西海」の特産品であり、求められる需要に対し安定した供給をできるよう努めております。また、恵まれた自然を守り、環境に優しい取り組みを推進する中で、特に再生可能エネルギーの利用促進を行い、次世代に向けた自然環境の保全・活用を図ります。



大島大橋



国指定天然記念物七ツ釜鍾乳洞



## 5



## 東彼杵町

面積：74.28km<sup>2</sup> 人口：8,298人（平成27年国勢調査）

東彼杵町は、長崎県のほぼ中央に位置し、面積約74km<sup>2</sup>、人口約8,000人を有する町です。

古くは長崎街道の宿場町として、また、平戸街道の起点として栄えた町です。江戸初期から 明治にかけては、五島近海で獲れた鯨の集積基地として栄え、現在も町内にはこうした街道や鯨にまつわる歴史の面影が各所に残されています。

東彼杵町は、2つの国道のほか、長崎自動車道が町を縦断、南西に臨む波静かな大村湾の海岸 線には、長崎・佐世保を繋ぐJR大村線が走り、隣接する大村市にある長崎空港にも車で30分と、陸海空の交通アクセスに恵まれた町です。

基幹産業である農業は、お茶、いちご、アスパラガスなどの生産が盛んで、特にお茶に関しては、長崎玉緑茶の生産量の大半を占め、「そのぎ茶」ブランドで親しまれています。平成29年度は蒸し製玉緑茶の部で農林水産大臣賞を受賞、さらには消費者が選ぶ日本一おいしいお茶「日本茶アワード2017」でも「日本茶大賞」に選ばれています。

県、町の工業団地による商工業振興のほか、お茶と景観を活かしたグリーンティリズムによる観光振興にも取り組み、「一流の田舎」づくりを目指しています。



そのぎ茶



千綿駅（井口勝也撮影）



## 1 西九州させば広域都市圏と構成自治体の概要

6



## 川棚町

面積：37.25km<sup>2</sup> 人口：14,067人（平成27年国勢調査）

川棚町は、長崎県のほぼ中央に位置し、面積約37km<sup>2</sup>、人口約1万4,000人を有する都市です。

佐世保市に隣接し、南は波静かな大村湾に面し、東には九州のmatterホルンと呼ばれる虚空蔵山がそびえ、西の大崎半島一帯は県立自然公園に指定され、町の中心を川棚川が貫流している豊かな自然環境が調和した風光明媚な町です。

肥前風土記のなかで、はるか昔「川岸之村」と呼ばれていたと記されている本町は、昭和9年に町制を施行し、川棚町としての歩みを始めました。第二次世界大戦中であった昭和17年に海軍工廠ができたのをはじめ、軍関係の施設が町内のいたるところにでき、町制施行時に7千6百人程度であった人口は当時3万人にまでふくれあがりました。

また、行政区域については、昭和18年に東彼杵町小音琴郷の一部を編入、昭和35年及び昭和37年に波佐見町中山郷の一部を編入し、現在に至っています。

川棚町はこれまで快適な住環境の創出に向けて上下水道や住宅環境、公園・緑地などの整備を積極的に取り組んできました。これからは川棚町の持つ自然や文化などの魅力を活かしつつ、地域における支え合いや保健・福祉の充実などに取り組み、「自然を愛し、くらし輝くまち」を目指していきます。



川棚大崎自然公園



川棚大崎自然公園





## 7



## 波佐見町

面積：56.00km<sup>2</sup> 人口：14,891人（平成27年国勢調査）

波佐見町は、長崎県のほぼ中央に位置し、面積約56km<sup>2</sup>、人口約1万5,000人を有する都市です。

江戸時代は「波佐見村」として大村藩に属し、明治期に「上波佐見村」と「下波佐見村」に分かれた後、昭和31年（1956）に合併し「波佐見町」となり、現在、町政施行後60年を数えます。

波佐見町は、400年の歴史を誇る窯業と農業の町でもあり、波佐見焼は全国の日用食器の約12%のシェアを持ち、普段使いの器として、その時代のニーズに合わせてデザインした手の届きやすい焼き物をつくっています。また、日本の棚田百選に選ばれた「鬼木棚田」をはじめ、田園風景の広がる緑豊かな街並みを形成しています。

さらに、今の波佐見町は“観光が楽しい町”でもあります。「桜陶祭」、「波佐見陶器まつり」、「皿山器替えまつり」など、作り手とふれあいながら波佐見焼を購入できるイベントのほか、「鬼木棚田まつり」をはじめとした豊かな自然や清流を楽しむイベントを、年間を通して楽しむことができます。

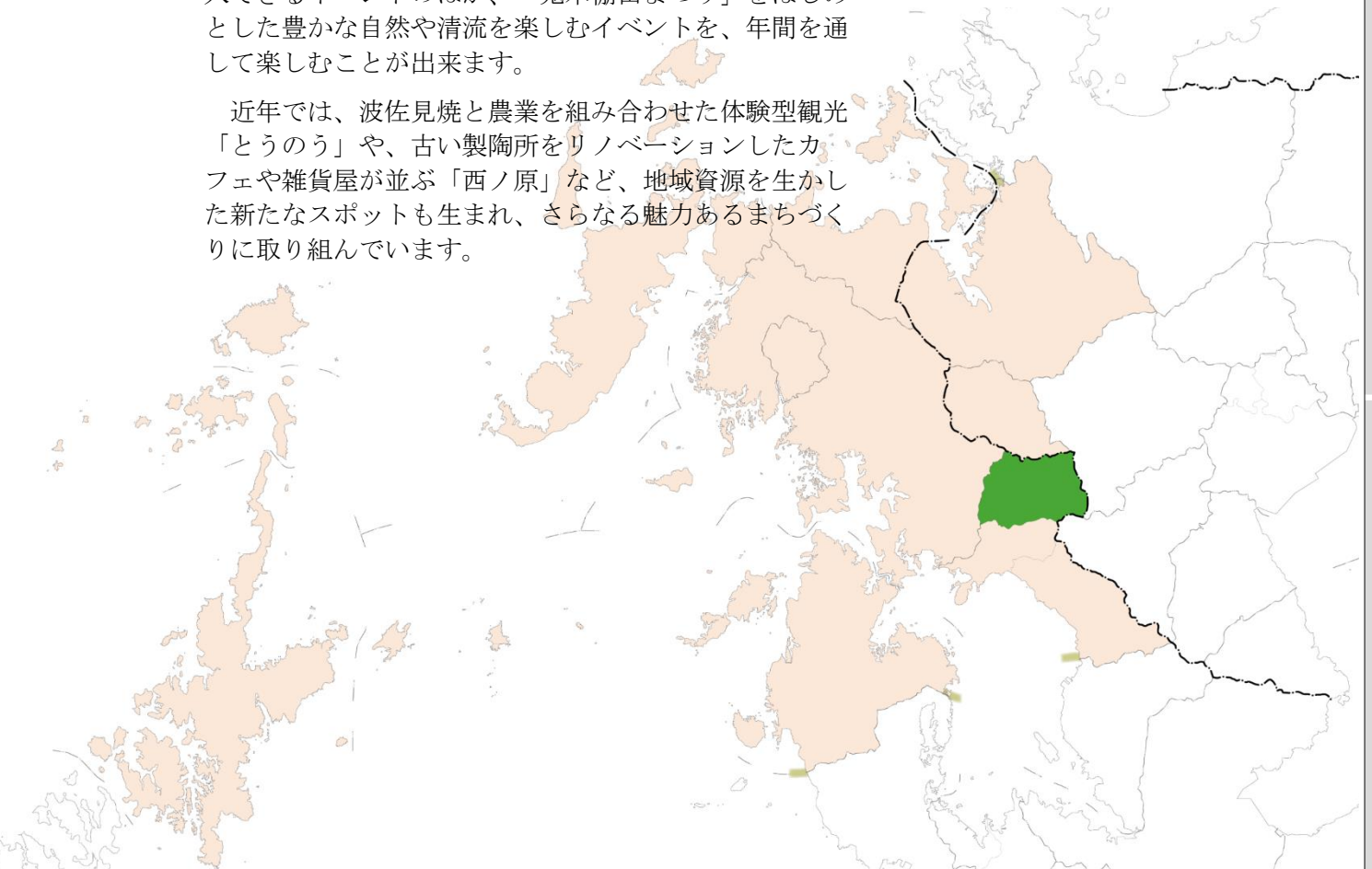
近年では、波佐見焼と農業を組み合わせた体験型観光「とうのう」や、古い製陶所をリノベーションしたカフェや雑貨屋が並ぶ「西ノ原」など、地域資源を生かした新たなスポットも生まれ、さらなる魅力あるまちづくりに取り組んでいます。



波佐見陶器まつり



鬼木棚田



## 1 西九州させぼ広域都市圏と構成自治体の概要

## 8 小値賀町

面積：25.52km<sup>2</sup> 人口：2,560人（平成27年国勢調査）

小値賀町は、五島列島北部に位置し、面積約26km<sup>2</sup>、人口約2,500人を有する都市です。

長崎県で最も小さな自治体でもあり、小値賀本島を中心に大小17の島々で構成される火山活動によって生じた珍しい群島で、島嶼部でありながら地形は平坦であり、複雑な海岸線が織りなす美しい自然環境に恵まれ、島のほとんどが西海国立公園に指定されています。

小値賀町には、旧石器時代から人々が連綿と営み続けた歴史・文化があり、肥前風土記にもその名が記され、往古は遣唐使の寄港地でもありました。藩政時代は、平戸藩松浦家の所領であり、廃藩置県後、笛吹・前方・柳の3村に分かれ自治制が敷かれていましたが、大正15年に3村が合併して小値賀村となり、昭和15年に町制を施行し、平成31年に町制施行80周年を迎えます。

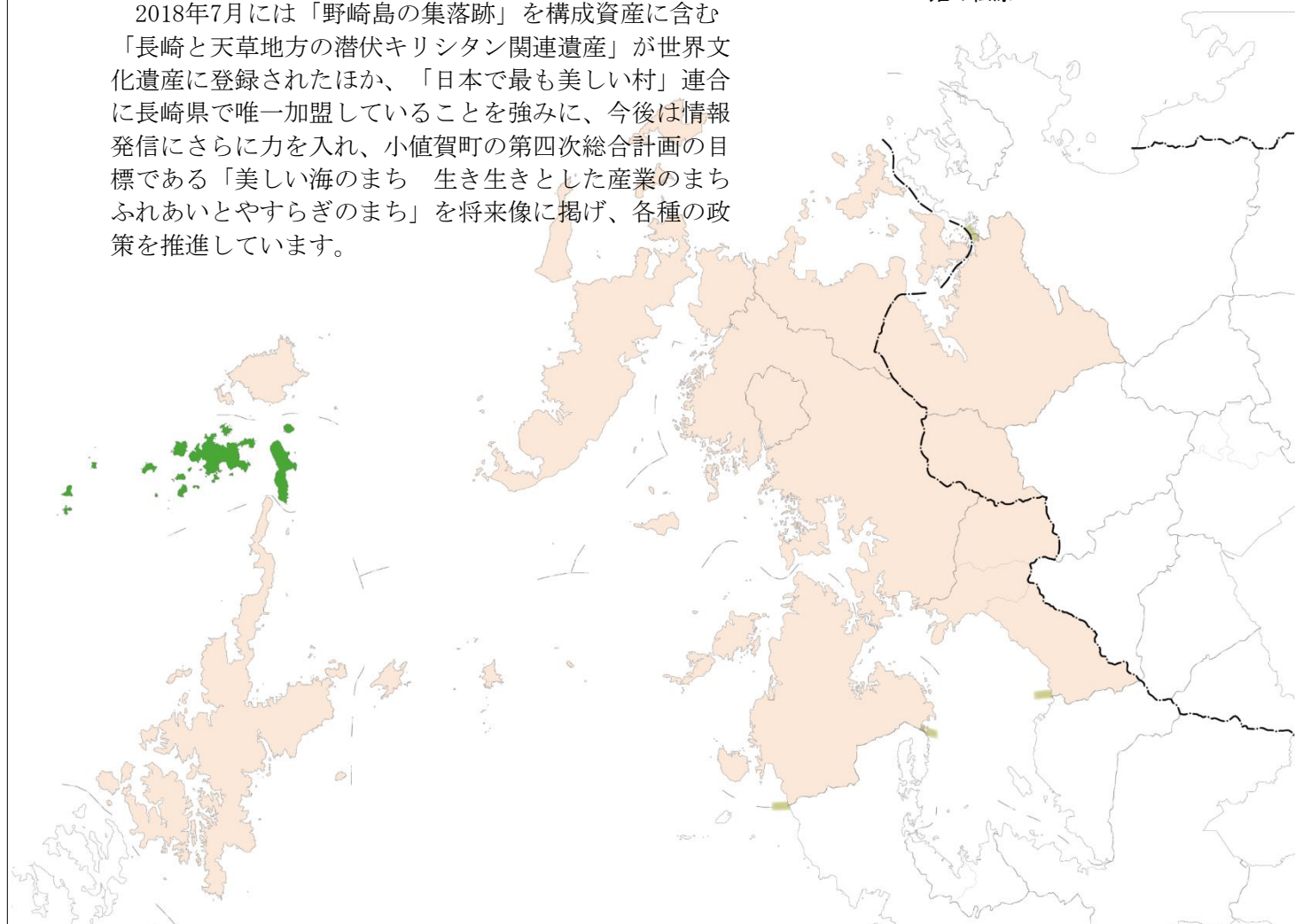
2018年7月には「野崎島の集落跡」を構成資産を含む「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産に登録されたほか、「日本で最も美しい村」連合に長崎県で唯一加盟していることを強みに、今後は情報発信にさらに力を入れ、小値賀町の第四次総合計画の目標である「美しい海のまち 生き生きとした産業のまち ふれあいとやすらぎのまち」を将来像に掲げ、各種の政策を推進しています。



旧野首教会



姫の松原





# 9 佐々町

面積：32.27km<sup>2</sup> 人口：13,626人（平成27年国勢調査）

佐々町は、圏域の中央部に位置し、面積約32km<sup>2</sup>、人口約1万4,000人を有する都市です。

佐世保市に隣接し、古くは佐々村、市瀬村が明治22年に合併して佐々村となり、大正から昭和にかけての炭鉱全盛期には、人口が2倍に膨れ上がるほどの勢いで急速に発展し、昭和16年に町政を施行しました。

近年は、佐世保市のベッドタウンとして発展してきましたが、平成23年9月に西九州自動車道佐々インターチェンジの供用が開始されたことにより、佐世保市などへのアクセスが格段に向上したことで、今後更なる発展が期待されます。

また、町の中央を北東から南へかけ、国見山（佐世保市世知原町）に源流を発する延長21.9kmにおよぶ佐々川が貫流し、川に沿って平野が開け、町が展開しています。

まちのシンボルである佐々川は、生物多様性に富んでおり、春の風物詩であるシロウオのほか、カブトガニやハクセンシオマネキなどの絶滅危惧種も多数生息しています。

今後は、こういった町の魅力ともいえる自然環境を守り続け、圏域の中央部という地理的好条件を活かしながら、“住んでよかった”“これからも住み続けたい”と思えるようなまちづくりを進めてまいります。



佐々川のシロウオ漁・河津桜



皿山菖蒲園



## 1 西九州させぼ広域都市圏と構成自治体の概要

10



## 新上五島町

面積：213.99km<sup>2</sup> 人口：19,718人（平成27年国勢調査）

新上五島町は、圏域の南西部で、五島列島の北部に位置し、面積約214km<sup>2</sup>、人口約1万9,000人を有する都市です。

中通島と若松島を中心とする7つの有人島と60の無人島から構成され、全般に細長く、急峻な山々が連なり、東は五島灘、西は東シナ海に面しており、海岸延長は約429kmにおよび、遠浅で砂浜が美しい蛤浜海水浴場やリアス式海岸の入江が織りなす美しい景観の若松瀬戸など海と山の豊かな自然を擁し、その大部分が西海国立公園に指定されています。

世界文化遺産に認定された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産である頭ヶ島の集落には、キリシタンの歴史を物語る教会や遺産があり、町内では異なる宗教が地元の方々の生活に溶け込み、共存してきた「祈りの島」としての歴史があります。

新上五島町は、日本有数の好漁場として水産資源に非常に恵まれており、漁船漁業と養殖業が営まれ、多種多様な水産物が水揚げされています。

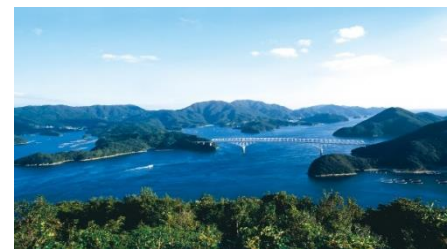
また、遣唐使が伝えたとも言われる五島うどんの産地であり、日本三大うどんの一つにも挙げられており、椿油が表面に塗られ、コシの強さ、のどごしの良さが特徴です。

新上五島町では、これらの豊かな自然と歴史文化を活かした観光振興による交流人口の拡大と特産品の販路拡大を目指しています。

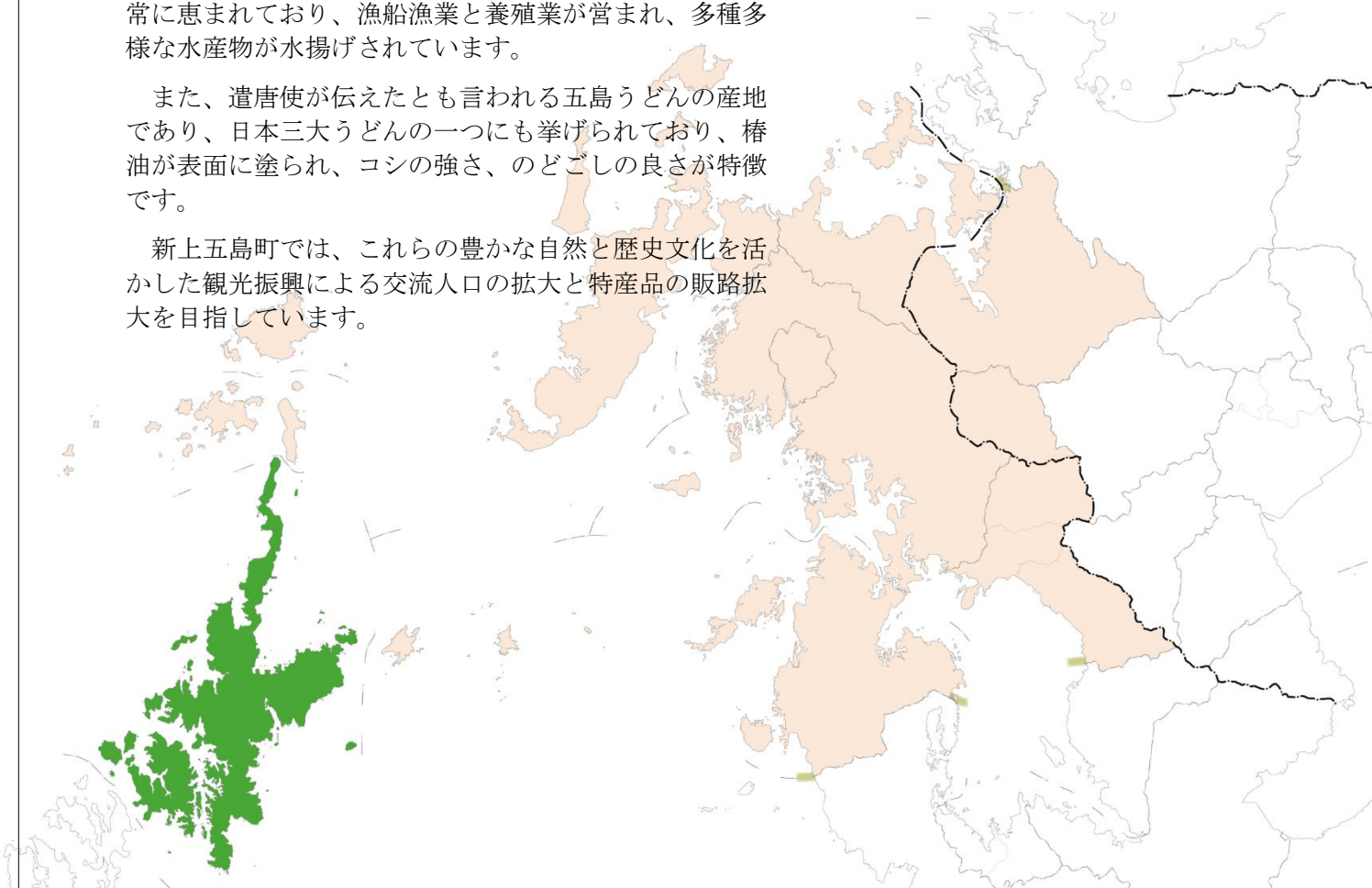


変更依頼(横長)

頭ヶ島天主堂



若松瀬戸



## 11



## 伊万里市

面積：255.25km<sup>2</sup> 人口：55,238人（平成27年国勢調査）

伊万里市は、佐賀県の西北部、圏域の北東部に位置し、面積約255km<sup>2</sup>、人口約5万5,000人を有する都市です。

中心市街地は江戸時代に当時は「伊万里」と称される肥前磁器の積み出し港として栄え、また、大川内山では陶磁美の粋を結晶させた「鍋島」を生み出すなど、文化的な都市として繁栄してきました。「伊万里焼」の名称は国内のみならず世界的にも著名であり、平成28年には「日本磁器のふるさと 肥前」として近隣市町とともに日本遺産に認定されました。

伊万里ブランドとして名高い伊万里牛や伊万里梨に代表される農業が市内各地で営まれています。

今日では、臨海部を中心に製造業が集積し、伊万里港においては、国の重点港湾および日本海側拠点港に選定されるとともに、韓国・釜山、中国・大連、上海などとの国際コンテナ定期航路が開設され、九州でも有数のコンテナ取扱港となっています。

さらに、西九州自動車道伊万里東府招インターチェンジが平成29年度に開通したことで、福岡都市圏まで約1時間での移動が可能となり、伊万里市の産業経済、観光文化の振興・活性化に大きな効果が期待されています。

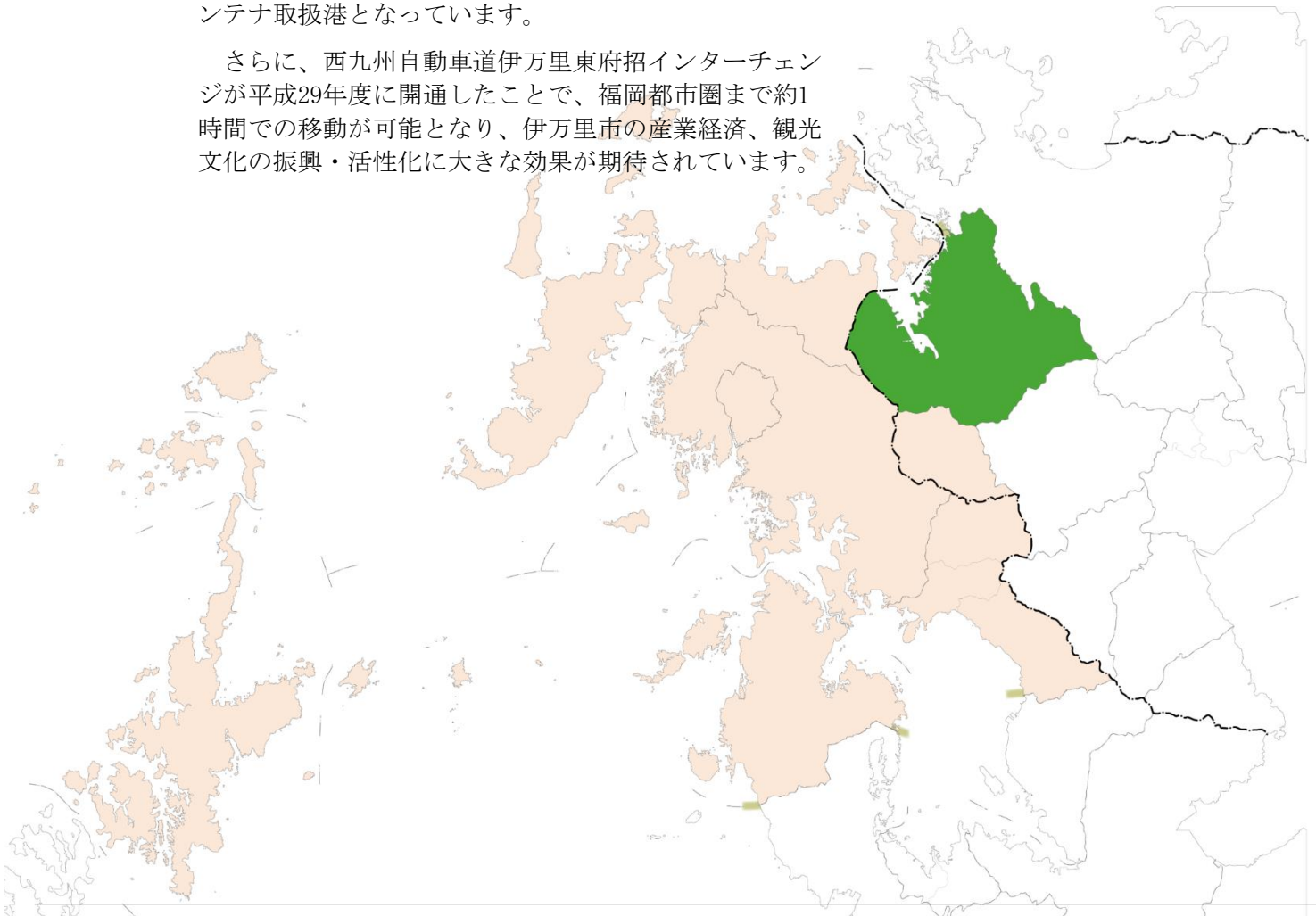


変更依頼(横長)

伊万里焼・鍋島焼



カブトガニ・カブトガニ繁殖地





## 1 西九州させぼ広域都市圏と構成自治体の概要

12



## 有田町

面積：65.85km<sup>2</sup> 人口：20,148人（平成27年国勢調査）

有田町は、本圏域の東部に位置し、面積約66km<sup>2</sup>、人口約2万人を有する都市です。

2006年3月1日に、旧有田町と旧西有田町が合併し新しい「有田町」が誕生しました。美しい景観を誇る田園地帯や、黒髪連山など豊かな自然に恵まれた町です。

古くからやきものの町として有名な有田町は、1616年に朝鮮人陶工李参平らによって泉山に陶石が発見され、日本で初めて磁器が焼かれました。以来、佐賀藩のもとで、磁器生産が本格化し、谷あいには「有田千軒」と呼ばれる町並みが形成され、繁栄を極めました。

この町並みは、現在も歴史的価値の高い建物が数多く残っており、1991年に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に、2017年には国際記念物遺跡会議（イコモス）の国内委員会の後世に残したい「日本の20世紀遺産20選」に選定されています。

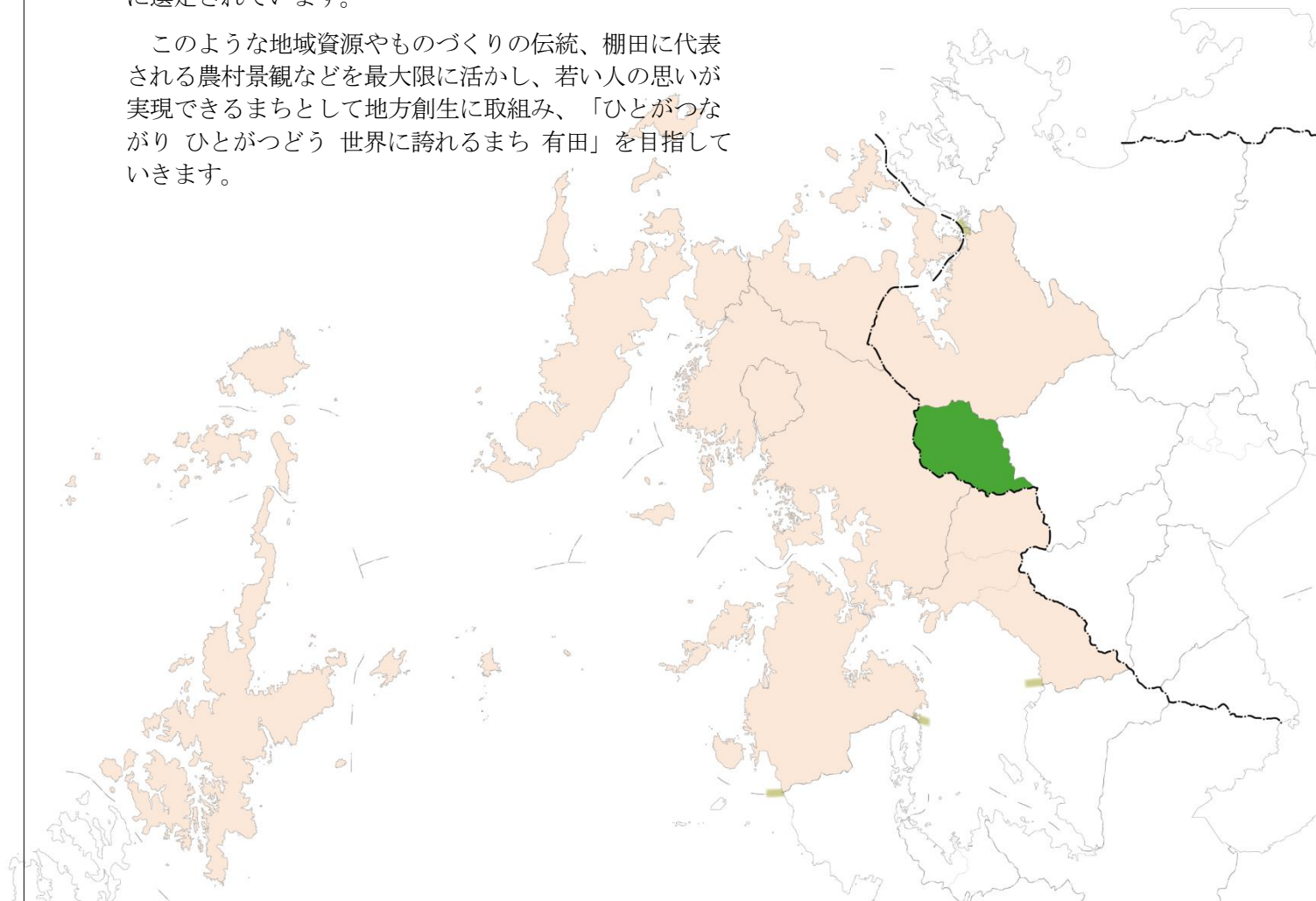
このような地域資源やものづくりの伝統、棚田に代表される農村景観などを最大限に活かし、若い人の思いが実現できるまちとして地方創生に取り組み、「ひとがつながり ひとがつどう 世界に誇れるまち 有田」を目指していきます。



内山地区のまちなみ



岳の棚田（Tシャツアート）





## 2

## 圏域の人口動態

## (1) 圏域の総人口の推移及び将来推計人口の推移

本圏域の総人口は、現在に至るまで減少傾向が続いており、将来推計においても減少し続け、平成52年（2040年）には、37万人程度になると予測されています。

構成市町の中では、佐々町、川棚町が増加傾向にあったものの、平成22年（2010年）以降は、全ての構成市町が減少に転じています。

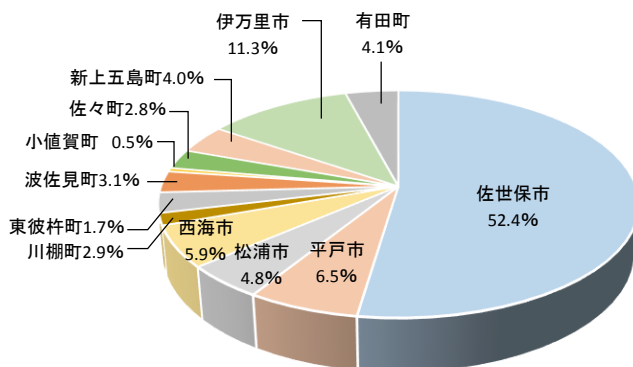
〔図表1-1 圏域構成市町の総人口推移・将来推計人口推移〕

|       | 昭和55年<br>(1980年) | 平成2年<br>(1990年) | 平成12年<br>(2000年) | 平成22年<br>(2010年) | 平成32年<br>(2020年) | 平成42年<br>(2030年) | 平成52年<br>(2040年) |
|-------|------------------|-----------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|
| 佐世保市  | 288,231          | 280,261         | 274,399          | 261,101          | 255,439          | 230,906          | 211,781          |
| 平戸市   | 50,849           | 46,572          | 41,586           | 34,905           | 31,920           | 23,132           | 17,875           |
| 松浦市   | 32,478           | 31,254          | 28,370           | 25,145           | 23,309           | 17,767           | 14,358           |
| 西海市   | 41,064           | 37,610          | 35,288           | 31,176           | 28,691           | 21,888           | 17,766           |
| 東彼杵町  | 10,353           | 10,188          | 10,026           | 8,903            | 8,298            | 6,583            | 5,432            |
| 川棚町   | 14,479           | 14,599          | 15,325           | 14,651           | 14,067           | 11,896           | 10,164           |
| 波佐見町  | 15,498           | 15,728          | 15,462           | 15,227           | 14,891           | 13,302           | 12,020           |
| 小値賀町  | 5,684            | 4,651           | 3,765            | 2,849            | 2,560            | 1,632            | 1,156            |
| 佐々町   | 11,812           | 12,068          | 13,335           | 13,599           | 13,626           | 12,880           | 11,948           |
| 新上五島町 | 38,140           | 32,123          | 27,559           | 22,074           | 19,718           | 12,965           | 9,323            |
| 伊万里市  | 61,243           | 60,882          | 59,143           | 57,161           | 55,238           | 48,109           | 42,938           |
| 有田町   | 23,495           | 23,413          | 22,314           | 20,929           | 20,148           | 17,207           | 15,046           |
| 圏域合計  | 593,326          | 569,349         | 546,572          | 507,720          | 487,905          | 418,267          | 369,807          |

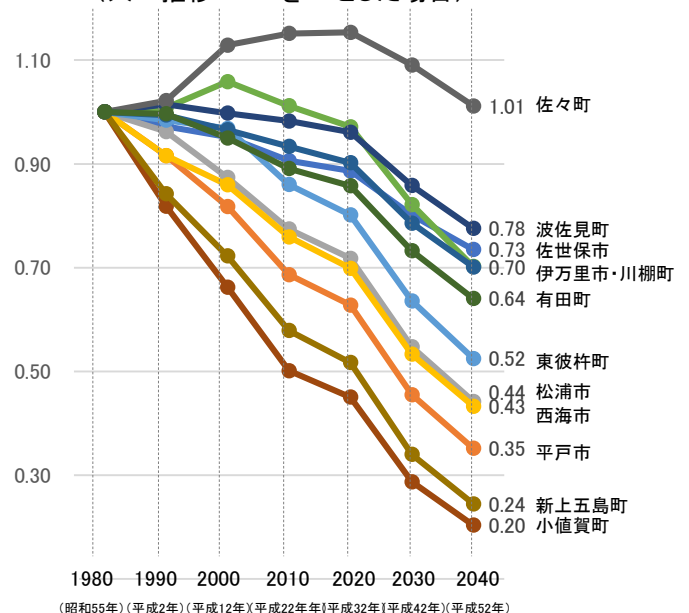
(出典)「平成27年国勢調査」、国立社会保障人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」(平成30年3月)

〔図表1-2 圏域の人口構成及び総人口・将来推計人口推移グラフ〕

(人口構成比:平成27年国勢調査)



(人口推移:1980を1.0とした場合)



(出典)「平成27年国勢調査」、国立社会保障人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」(平成30年3月)

## 2 圏域の人口動態

### (2) 圏域の総人口の推移及び将来推計人口の推移

圏域の年少人口（15歳未満）及び生産年齢人口（15歳～64歳）は減少傾向が続くと予測されており、老年人口（65歳以上）は平成32年（2020年）までは増加傾向にあるものの、以降、減少に転じる予測となっています。

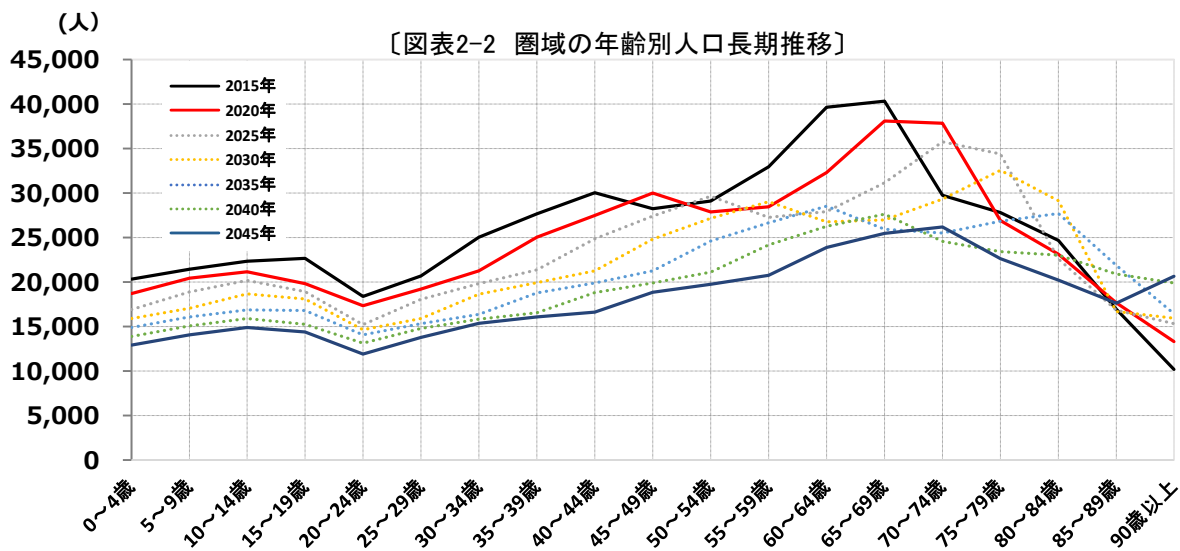
また、本圏域の年齢別人口構成比率の推移については、生産年齢人口（15歳～64歳）の比率の減少傾向が顕著となっている一方、年少人口（0歳～14歳）の比率は約12%台を維持する傾向が予測されています。

〔図表2-1 圏域の年齢別人口長期推移〕

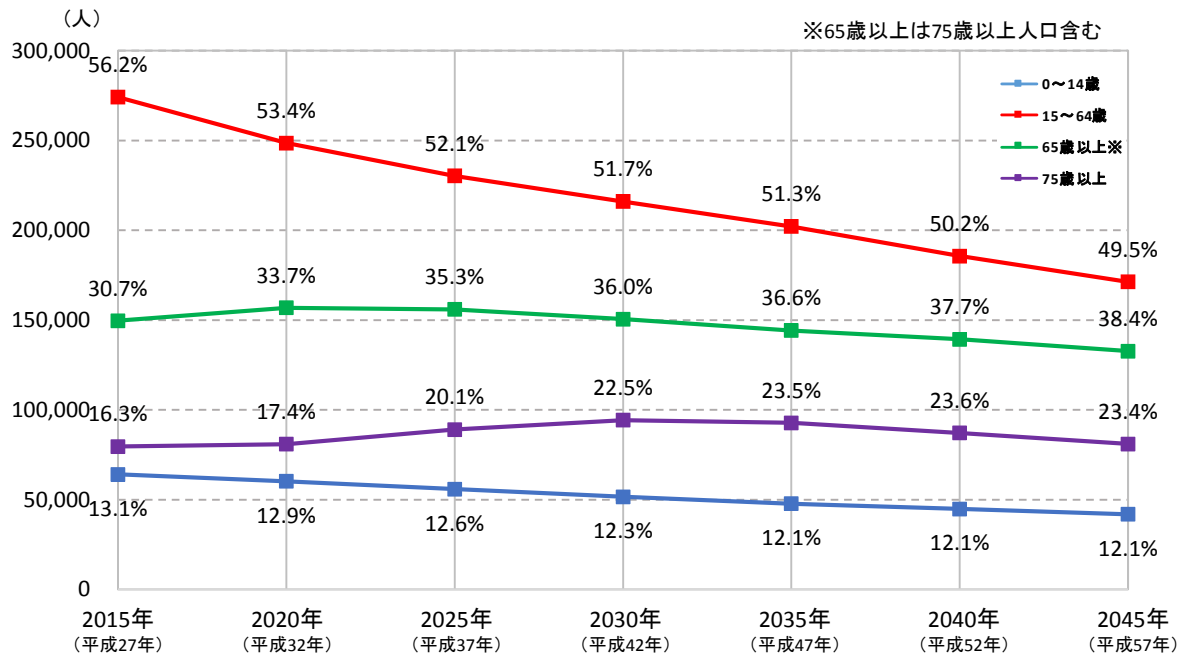
| 男女計    | 2015年   | 2020年   | 2025年   | 2030年   | 2035年   | 2040年   | 2045年   |
|--------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 総 数    | 487,905 | 465,652 | 442,163 | 418,267 | 394,093 | 369,807 | 345,864 |
| 0～4歳   | 20,294  | 18,704  | 16,884  | 15,889  | 14,876  | 13,889  | 12,918  |
| 5～9歳   | 21,440  | 20,419  | 18,872  | 17,052  | 16,067  | 15,055  | 14,061  |
| 10～14歳 | 22,323  | 21,131  | 20,160  | 18,647  | 16,857  | 15,889  | 14,897  |
| 15～19歳 | 22,649  | 19,820  | 18,903  | 18,078  | 16,797  | 15,226  | 14,386  |
| 20～24歳 | 18,381  | 17,317  | 15,193  | 14,612  | 14,044  | 13,100  | 11,890  |
| 25～29歳 | 20,662  | 19,182  | 18,060  | 15,887  | 15,297  | 14,770  | 13,779  |
| 30～34歳 | 25,004  | 21,248  | 19,797  | 18,614  | 16,347  | 15,830  | 15,357  |
| 35～39歳 | 27,647  | 25,021  | 21,336  | 19,924  | 18,778  | 16,536  | 16,058  |
| 40～44歳 | 30,037  | 27,450  | 24,853  | 21,260  | 19,874  | 18,790  | 16,615  |
| 45～49歳 | 28,224  | 29,968  | 27,404  | 24,804  | 21,255  | 19,890  | 18,844  |
| 50～54歳 | 29,078  | 27,852  | 29,622  | 27,144  | 24,584  | 21,087  | 19,751  |
| 55～59歳 | 32,924  | 28,432  | 27,242  | 29,006  | 26,633  | 24,173  | 20,751  |
| 60～64歳 | 39,609  | 32,270  | 27,895  | 26,763  | 28,510  | 26,240  | 23,869  |
| 65～69歳 | 40,320  | 38,073  | 31,124  | 26,975  | 25,913  | 27,622  | 25,470  |
| 70～74歳 | 29,745  | 37,809  | 35,744  | 29,319  | 25,487  | 24,542  | 26,171  |
| 75～79歳 | 27,800  | 26,891  | 34,359  | 32,548  | 26,825  | 23,402  | 22,610  |
| 80～84歳 | 24,662  | 23,130  | 22,588  | 29,138  | 27,689  | 23,016  | 20,209  |
| 85～89歳 | 16,929  | 17,641  | 16,822  | 16,669  | 21,847  | 20,880  | 17,605  |
| 90歳以上  | 10,177  | 13,294  | 15,305  | 15,938  | 16,413  | 19,870  | 20,623  |
| 0～14歳  | 64,057  | 60,254  | 55,916  | 51,588  | 47,800  | 44,833  | 41,876  |
| 15～64歳 | 274,215 | 248,560 | 230,305 | 216,092 | 202,119 | 185,642 | 171,300 |
| 65歳以上※ | 149,633 | 156,838 | 155,942 | 150,587 | 144,174 | 139,332 | 132,688 |
| 75歳以上  | 79,568  | 80,956  | 89,074  | 94,293  | 92,774  | 87,168  | 81,047  |

※65歳以上は75歳以上人口含む

(出典)「平成27年国勢調査」、国立社会保障人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」(平成30年3月)



〔図表2-3 圏域の年齢別人口構成比率推移〕



(出典)「平成27年国勢調査」、国立社会保障人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」(平成30年3月)

### (3) 圏域の自然動態

少子高齢化の進行により、圏域の自然動態は出生数が減少、死亡数が増加の傾向となっており、平成22年以降は自然減の拡大傾向で推移しています。

〔図表3-1 圏域の自然動態の推移〕

